様式３

令和6年度　自 己 評 価 表

鳥取県立米子養護学校

【中長期目標（学校ビジョン）】

一人一人の能力を最大限に伸ばし、自立と社会参加に向けて、より豊かに生きる児童生徒を育成する。

※ キーワード 【コミュ力アップ（コミュニケーション力アップ）Lv.2】　めざせ！あいさつ世界一！！

【今年度の重点目標】

〇学ぶ意欲と自己肯定感を高める教育活動の展開

〇安全で安心な学校づくり

〇お互い認め合い、高め合う教職員集団の実現

〇表現力及び体力の向上、健康増進

〇家庭・地域との連携強化

〇業務改善の推進と組織の活性化

評価基準　A：十分達成　B：概ね達成　C：変化の兆し　D：まだ不十分　E：目標・方策の見直し

〔100%〕　〔80%程度〕　〔60%程度〕　〔40%程度〕　〔30%

様式３

	年　度　当　初					評価結果　（２）月		
	評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
小学部	主体的な学びを促す取り組み	○児童が意欲的・主体的に取り組みながら、生活に汎化する力を培うための指導・支援の工夫	○学びを重ねることでできることが増えていくが、整えた状況の中だけでできることが多く、状況や支援が少しでも違うと不安になったりできていたことができないように感じてしまったりする児童がいる。また、自分で考えたり工夫したりする機会が少なく、教職員の評価に頼る児童もいる。 ○先生が好き、学校が好きと思えるよう日々の支援を心がける教職員が多い。反面、学ぶことに関しては児童の力をつけることに主眼を置くあまり、教職員から提示された活動をこなすことを中心とした授業になりがちである。	○保護者と情報を共有しながら児童に必要な力を模索し、学校生活だけでなく、家庭生活や地域生活の中でできるようになることを意識し、２つ以上できることを増やす。	○保護者との面談や連絡帳での聞き取り等を通じて現状を密に共有し、児童に必要な力と活用場面を明確にする。また、必要な場面で必要な指導・支援ができるよう、かかわる教職員で情報を共有する。 ○定期的な評価ができるよう、保護者と共に評価できる項目や機会を相談し、実施する。	○保護者との情報共有は、日々のやり取りに加え、懇談の機会をとらえて映像や画像で日々の様子をわかりやすく伝え、ともに評価を行った。教員アンケートで保護者と情報共有できていると答えた教員は８割を超え、２つ以上できるようになったと答えた教員は84%であった。「伝えられる言葉が増えた」「自分でカバンの開け閉めができるようになった」等認知や生活動作などいろいろな場面でできることが増えたと言う意見があった。	A	○具体的な場面を想定してねらいの設定をしたり、学習組み立てを行ったりして保護者に説明ができたと答えた担任は多かった。半面、25%の級外の教員は担任と必要な情報のみの共有にとどまっていると答えていることから、教職員間での共有化が必要である。それに向け、話し合いの方法や評価の設定について研修したり、児童の話がもっと積極的にできる方法について学部で模索したりする。
		○学ぶ楽しさを感じながら授業に向かい、児童の能力向上につながる授業づくり・改善の実践を行う		○児童が学ぶことが楽しいと感じる授業づくり・改善を行うことができたと答える教員が８割を超えている。	○授業の評価は関わる教職員で定期的に行う。 ○研究部の授業実践と連携をとり、良い実践が次の授業づくりや改善に生かせるよう学習グループや学部会の機会を利用して声を掛け合う。 ○教員が自らの指導や支援を振り返られるよう、学期ごとの教員アンケートをとる。	○児童の様子を毎時振り返る中で、授業改善をして児童が「面白い」「またしたい」と思える授業について実践した。授業づくり・改善ができたと答える教員が60%と中間評価時よりも増えた。できている時もあると答えた教員は38%であったが、「もっと○○すれば」「次は○○したい」と次の授業を見据えた改善案を考えている教員も多くいた。	B	○授業改善について教職員の意欲や改善のスキルが高まってきた。よりよい授業を構築するために、業務精選をしたり年間指導計画を見直したり、形骸化に気がついて改善したりする。

様式３

	年　度　当　初					評価結果　（２）月		
	評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
中学部		○生徒自身が考え、選択し、判断、表現できる学習活動や支援の工夫	○学習や活動に真面目に取り組んでいるが、受け身であったり声かけや指示を待っていたりする生徒が多い。 ○決まった型の質問には応じることができるが、自分の思いや考えを自由に伝えることには苦手意識がある。 ○あいさつをしようとする意識はあるが、促されないとできない場面も多い。 ○人との適切な距離が保てず、相手に不快感を与える関わりをしてしまいがちな場面がある。 ○人との関わりに苦手意識のある生徒がいる。	○学習活動や生活の中で、生徒が自分の考えや思いを選択したり表現したりしていると感じる教員が８割を超えている。	○わかりやすい発問、思考を喚起する選択肢等による、わかる・楽しい授業づくりの工夫をする。 ○体験活動や調べ学習、実物に触れる学習等による、五感を刺激する授業や活動を工夫する。 ○振り返りの時間を確保する。	教員の振り返りアンケートにより、生徒が自分の表現方法で発信や振り返りができるようになってきたと感じると回答した教員は76％であった。わかりやすい発問や振り返りの時間の確保に取り組んだと回答した教員も１学期と比較して12～16％増加した。学習活動や支援の積み重ねが生徒の表現力の向上へとつながっている。 生徒の姿から、あいさつ・返事、言葉遣いについて十分・概ね達成と感じる教員は80％、仲間との協力については64％であった。教職員の模範やできたときの即時評価等の取組が生徒の変容につながった。一方で、仲間と協力しようとする姿を評価する数値は増えたが、設定された場以外での様子や指示待ちの生徒へのアプローチなどに課題が残る。	B	○発問・教材の工夫やＩＣＴ機器の活用等、わかる授業づくりに引き続き取り組むとともに、その土台となる実態把握や障がい特性の理解、教職員間の共通理解に努める。 ○教職員が模範を示したり即時評価をしたりする取組の継続。 ○日常的なペアワークやグループ活動等、コミュニケーションを通じて目標を達成する体験の積み上げ。 ○地域学校協働活動や交流等、様々な人と関わる機会の設定。
		○人との関わり、社会との関わりを広げるための、コミュニケーション力、表現力の育成		○様々な場面で、生徒があいさつや返事、適切な言葉遣い等でコミュニケーションを取ろうとしている、仲間と協力していると感じる教員が８割を超えている。	○「止まってあいさつ」「目を見てあいさつ」等、具体的なあいさつの仕方を指導する。 ○教職員自身の言葉遣いやあいさつを意識した関わりを行う。 ○仲間と協力して達成できる課題を設定する。 ○行事や活動を通した、他学部や地域の方々との交流の場を設定する。		B	

様式３

	年　度　当　初					評価結果　（２）月		
	評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
高等部		○卒業後の生活に必要な基本行動の確立を目指す	○経験が少なく、一般常識や社会生活で必要な知識の習得が十分でない。 ○自分なりの解釈で、できていると判断したり、逆にできていないと不安感を持ったりする生徒が多い。 ○何事にもまじめに取り組もうとするが、すぐにあきらめてしまいがちな生徒が多い。 ○様々な実態の生徒が多く在籍している。人との関わり方に課題があったり、一緒に何かをやりとげた経験が少なかったりする生徒が多い。	○生徒たちが高等部の目標「姿勢、あいさつ、時間、みだしなみ」を意識して生活できている。（生徒のアンケート教職員のアンケートどちらも達成率が８割を超えている）	○生徒が普段から意識できるよう、各教室に目標を掲示する。 ○生徒自身が意識して取り組めるよう、委員会活動や生徒会活動と連携して声掛けをしていく。 ○どの作業班も作業開始時や反省の時に「姿勢、あいさつ、時間、みだしなみ」についてチェックしたり、確認したりする時間を設ける。	生徒、教師のアンケートともに８割を超えた達成率だった。できなかったことについても、具体的にこういうところがこうだった、気をつけたいなど、意識していることがうかがえる生徒のコメントが多かった。また、教員の声掛け等ではなく、生徒自身が自分で気づいたり、生徒同士で注意しあうなどの姿が増えたという回答がとても多かった。	A	○「姿勢、あいさつ、時間、みだしなみ」は継続して生徒に提示し、高等部全体で取り組んでいく。 ○教員の姿も社会人の見本として重要。指導がばらばらにならないためにも、共通理解の機会を十分にとる。
		○周囲の人と共に豊かに生きていく生徒の育成		○様々な人と関わりながら、自分の役割を意識して活動に取り組んでいる。（生徒のアンケート、教職員のアンケートでどちらも達成率が８割を超えている）	○人との関わりの中で、自分の役割を意識していけるよう、責任を果たしたり、やり切ったりした時の価値づけをする。 ○校内外の様々な人と関わる場面をつくる。 ○主体的に取り組む機会を多く持つ。 ○様々な場面で個人の力だけでなく、チームでつくりあげているということを伝えたり、人と関わりながら協力する活動を充実させたりする。	生徒、教師のアンケートともに８割を超える達成率だった。生徒の回答からは作業学習や表現活動、行事など、周りの人と協力したり、関わったりし、自分の役割を果たすよう意識できた様子がうかがえた。教員の回答からは、生徒自身が考えて動く様子や、人との関わりの中で成長した様子についてのコメントがたくさん見られ、目標は達成されたと思われる。	A	○人との関わりについては今後も継続して指導していく。適切な関わり方や自分の思いを表現するなど、コミュニケーション力の向上を目指して取り組んでいく。 ○校内外を問わず、様々な人と関わる機会や生徒が主となって活動する機会を積極的に設定していく。
全体	業務改善の推進と効率化	○時間外業務の削減	○個別の面談を実施し、時間の使い方を工夫する教職員も見られたが、月30時間を超える職員もおり継続して取組む必要がある。 ○時間外業務申請書による事前申請に取り組んだが、効果的ではなく他の取組が必要。	○時間外業務削減（前年比75%）	○月間時間外勤務30時間超の者に対する個別面談の実施（随時） ○ライトダウン（毎週水曜日18：30退勤）の徹底 ○教職員同士のコミュニケーションによる業務互助の推進 ○勤務簿（カンパニー）の自己管理	○時間外勤務は微増した。 ○状況に応じ個別面談を実施した。 ○時間外勤務の偏り（平均と最大値の差）は減少した。 ○18:00ライトダウン日の居残りは減少した。 ○勤務簿の日次提出忘れ減少した。	C	○校務分掌の見直し等による時間外勤務の偏りを是正 ○ライトダウンの拡大（設定時刻或いは設定日）

様式３

	年　　度　　当　　初					評　価　結　果　　（　２　）月		
	評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
教務部	目的を明確にした諸帳簿の作成とＩＣＴ機器等の活用の推進	目的を明確にした諸帳簿の作成	○これまで個別の教育支援計画と個別の指導計画を通知表と兼ねていたが、今年度から別で作成することとした。特に個別の指導計画は、学校の計画としての要素と本人・保護者へ学習の成果を伝えるという要素が一緒になっており、それぞれの目的があいまいになっていた。今後、作成の目的を整理する必要がある。	○個別の教育支援計画、個別の指導計画、通知表の作成目的の違いを理解し、教育課程や年間指導計画とのつながりのある個別の指導計画が作成されている。	○諸帳簿の作成の目的を確認しながら、新様式での作成の仕方を説明する。 ○個別の指導計画は、知的の教科の考え方をもとに、教育課程や年間指導計画とつながりのある計画になるよう、目標設定や評価の時期に繰り返し伝える。	新様式となった個別の指導計画と通知表は、それぞれの作成の目的が明確になってきている。通知表は本人、保護者へ学習の成果を伝える内容になりつつある。個別の指導計画は、観点別学習状況の評価について、まだ戸惑いがみられる。	B	個別の指導計画の目標設定や評価について、全体や学部の研修や、個別の指導計画をもとにした個を語る会での検討を通して、理解を深めていく。
		ＩＣＴ機器等の活用の推進	○昨年度の校内情報研修や情報発信等の取り組みから、教職員のＩＣＴ機器の操作、活用に関する知識能力は向上してきたが、ＩＣＴを有効に活用するための環境（機器の管理・情報共有・業務改善のためのシステム）の面で整備が必要な部分がある。	○教育活動、校務においてＩＣＴ機器を有効活用するための環境整備（機器の管理・情報共有・業務改善のためのシステムの整備等）、情報発信、提案が行われ、ＩＣＴ機器が活用されている。	○ＩＣＴ機器を活用しやすい環境整備（機器の管理・情報共有・業務改善のためのシステムの整備等）を行う。 ○授業や校務におけるクラウドサービス（Google Workspace for Education、Microsoft３６５）の有効活用を促進するための取り組みを行う。	○校内情報サイトのリニューアルを行った。フォルダ等にアクセスできるボタンやICT機器などの貸出表タブの追加をしたことで、より使いやすくなったという意見をいただいた。また、学校ホームページ記事作成の基本方針をまとめ、運用を開始した。職員からは、大きな負担がなくなり記事を作成しやすくなった。という意見を多くいただいた。 ○クラウドサービスに必要な技能を整理し、それを基に研修を実施した。研修を受けて、生徒に身につけさせたい資質・能力を意識した学習計画を考える職員が増えた。また、プログラミング教材やグラフィックデザインツールを活用した授業や、情報共有のためにアプリを活用するグループも見られるようになった。	B	○職員間で円滑に情報を共有し、業務を効率化する仕組みを整えることやICTを安全に使うためのリテラシー教育を進められるように、教育活動や校務にしっかりと役立つ環境整備に取り組んでいく。また、フォルダ構成についてＲ８年度のサーバ更新に関する県の仕様に合わせ検討していく。

様式３

	年度当初					評価結果（２）月		
	評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
研究部	学校全体で取り組む校内研究	一貫性のある校内研究	○3ヶ年の校内研究の2年目である。昨年度は学部研究、実践報告会を通して、教科の見方・考え方を知ったり、他学部の取組を共有したりすることができた。 ○昨年度は実践報告会後に授業改善に向けた方向性を示すことができなかった。授業研究会のため、実践報告会のための研究という雰囲気もあり、研究を通して授業改善を進めていくことが課題である。	○学部研究、授業研究会、実践報告会の学びを、8割以上の職員が授業改善に生かしている。	○計画的に校内研究、学部研究を進める。 ○アドバイザー派遣事業等を活用して外部講師を招聘し、授業づくりや校内研究の助言をいただく。 ○研究テーマに沿った他校の取組や、授業改善の参考になる資料等を随時紹介していく。	○月に1回程度の学部研究、夏休みの教職員研修、11月の授業研究会（アドバイザー派遣事業）、12月の実践報告会を計画通り実施できた。外部講師から助言をいただきながら研究推進、授業改善ができた。 ○校内研究を通して授業改善に取り組んだか、という教員アンケートで９２％（１０１／１０９人）が「とてもした」「ある程度した」と回答した。 ○職員図書に研究コーナーを設置し、情報発信をした。また先進校視察を実施し、他校の取組を報告した。	A	○先進校の取組等を参考にしたり、研究の取組を職員にわかりやすく示したりしながら、計画的に校内研究を進める。 ○アドバイザー派遣事業等を活用して外部講師から助言をいただいたり、授業づくり、改善に役立つ資料や書籍、情報等をわかりやすく校内で共有できるようにしたりする。
保健安全部	健康教育の充実と危機管理意識の向上	○健康課題（肥満・歯周病など）に対しての指導・支援の充実	○生活習慣アンケートから把握した児童生徒の健康実態や家庭の様子を指導、支援に生かしきれていない。 ○健康課題解決に向けて、保護者と連携しながら、組織的、継続的な取り組みが必要である。	○保護者や教職員が生活習慣を意識し、改善しようとしている。（研修会等の事後アンケート結果が８０％以上）	○児童生徒の健康実態や家庭の様子を把握するための生活習慣アンケートの実施と、アンケート結果の周知 ○歯と口の健康づくり事業の推進 ○保健だよりや食育だより、ホームページを活用した啓発 ○保護者連携や指導支援の充実を目指した研修会の実施	○７月実施の生活習慣アンケート（食習慣や歯磨き、運動習慣）結果を、１０月学校保健委員会での意見と併せて教職員に周知し、保健だよりや食育だより、ホームページでの啓発に取り組んだ。 ○「歯と口の健康」をテーマとした歯科衛生士による保護者研修会は、全校で１０名の参加だった。「参考になった」「家庭でも取り組みたい」「より障がい児の歯について詳しい方や先輩保護者の話が聞きたい」などの感想があった。	B	○健康課題解決の方向性を絞り、各教科領域、分掌と連携して計画的に取り組みを進めるとともに、保護者を巻き込んだ取り組みを行う。
		○防災・防犯（火災、地震、不審者等）に関する危機管理意識向上	○発生予測が難しい災害に対して、教職員一人一人の危機管理意識は高まってきているが、防災体制の整備及び充実を図る必要がある。 ○今年度20％程度が新着任教職員であり、防災体制の周知徹底が必要である。	○教職員の防災に対する危機管理意識が高まっている。 （訓練等の事後アンケート結果が８０％以上）	○訓練後の教職員アンケートや外部専門家（消防署、警察署等）を生かした計画的な研修会、訓練等の実施 ○外部の専門家（消防署、警察署等）の助言を生かした、防災マニュアルの見直し	○外部専門家を活用し、避難訓練（火災）や教職員向け研修会や訓練（消火・不審者対応・地震）を実施した。事後アンケートで、研修会や訓練等の内容を「（防災に対する）意識が高まった」「今後に生かしたい」と９５％以上の教職員が回答した。	A	○今後も外部専門家を活用した研修・訓練を計画的に行う。 ○職員一人一人が自分の役割について考え、行動できるよう、様々な場面を想定した研修や訓練を計画する。

様式３

	年　　度　　当　　初					評　価　結　果　　（２）月		
	評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
生徒指導部	組織的・継続的な対応	○生徒指導上の諸問題への迅速かつ適切で組織的、継続的な対応	○昨年度は問題行動等の発生時には、迅速にいじめ対策委員会を実施したり、月に１回生徒指導不登校対策委員会を実施したりして、各事案に対して適切に対応を行ってきた。本年度、新たな部員が加わったので、改めて報告・連絡・相談・確認を徹底することを意識し、昨年度同様に情報共有に努める必要がある。いじめ対策委員会では、進め方を見直し、事案解決に向けての進め方が明確になるよう努めた。しかし、実際に進めてみると、進め方に迷うことがあったので、今後再確認や改善が必要と感じることがあった。	○生徒指導不登校対策委員会等で学部間の情報共有をし、大きな問題にならないよう迅速な対応で未然防止、早期発見、早期対応ができている。	○報告、連絡、相談、確認を徹底することを意識することと、委員会での情報共有はしっかりと行い、議論する内容をできるだけ絞り、必要があれば関係機関と連携し、迅速かつ適切な対応に努める。いじめ対策委員会では、進め方の再確認や改善を行い迅速な対応に努める。	○生徒指導不登校対策委員会を通して、各事案の情報を共有し、迅速かつ適切な対応に努めることができた。また、いじめ対策委員会では進め方の再確認や改善を行い、会の進行を迅速に進めることができた。生徒指導委員会では、対応の仕方や手立てを整理したが、まだ十分に活かしきれていないので、今後も適切かつ迅速な対応ができるよう周知の徹底と会の進め方の改善を図る必要がある。	B	○今後も迅速な報告、連絡、相談、確認の徹底と、各委員会での情報共有はしっかりと行う。また、解決に向けた対応の仕方や手立ての周知の徹底と会の進め方の改善を行い、迅速かつ適切、そして組織的な対応に努める。
				○中学部単一３年生、高等部単一１年生全員の個人面談を実施して生徒の実態把握に努め、早期に諸問題を発見し指導や支援に生かしている。	○未然防止の観点でＳＣや教員による中学部単一３年生、高等部単一１年生全員の個人面談を実施し、生徒の実態把握に努める。その他の学年も必要に応じて実施していく。実施後、掴んだ情報をもとにカウンセリングの視点を持って、実施した生徒の指導や支援に生かしたり、引き続きカウンセリングを行ったりしていく。	○ほぼ生徒全員の面談を実施した。また、SCによる面談だけでなく、教師と話す機会を設定し、諸問題への未然防止、早期発見、対応に努めることができた。生徒のカウンセリング後には担任へのコンサルを毎回行い、その内容を学年団での共有し、指導や支援に生かすことができた。	A	○中学部単一３年生、高等部単一１年生全員の個人面談を継続して実施する。面談を継続して行う必要のある生徒に対しては、計画的に面談を実施する。
人権教育部	児童生徒及び教職員の人権意識の向上	○年間指導計画の運用と評価	○年間指導計画の改訂がされたばかりで活用しながら、加除修正が必要となること。 ○これまで指導計画等で児童生徒につけたい資質能力の記載は定着してきたが、授業を省みて評価するまでには至っていないこと。	○質の高い学習内容にするために、人権教育年間指導計画が有効に活用されている。有効に活用できたと回答する教員が８割に達する。	○つけたい資質能力の番号から、どんな力をつけることにつながるのか確認する。 ○各教科・領域とねらいを見比べ、教科領域等の特質を踏まえた学習内容かどうか判断する。 ○年計にある題材ごとに記録をつける。（○×△、コメント等） ○年計の活用についての研修を行う。	○「年計に記されている児童生徒につけたい資質・能力やねらいは妥当であったか」の問いに対して７３％の職員が概ね妥当以上と回答、「教科・領域の特質を踏まえた学習内容内かどうか判断するようにしている」の問いに対しては８０％の職員が概ね達成と回答した。 ○学部ごとに実践記録を通して振り返ったり、聞き取りを行ったりした。結果、人権教育に関わる単元での活用については各学部とも十分に活用ができていた。一方で、普段から人権教育の資質・能力を意識しながら指導している職員は２３％であった。	B	○年計の運用にあたっては、児童生徒につけたい資質・能力を意識した実践ができているので、引き続き計画案等に明記していく。 ○評価にあたっては、個々の職員が年計を評価していくことは難しいので、振り返りをするための研修時間を設定して取り組むようにする。 ○各教科領域のねらいや人権教育のねらいの整合性をさらに精査していく。

様式３

	年　度　当　初					評価結果　（２）月		
	評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
進路指導部	家庭・地域との連携強化	○児童生徒、保護者のニーズにあった進路情報の提供	○教職員アンケートでは約８割が「本人、保護者と将来をイメージを共有できている」と回答。懇談や中高進路希望調査を機会に生徒自身が進路について考えたり、保護者と思いを共有したりすることができている。 ○保護者の約８割が「必要とする進路情報が提供されている」と感じている。一方、「進路担当だけでなく、担任も情報を持ち、懇談等で提供してほしい」との声もあった。	○児童生徒・保護者のニーズに応じた進路情報や、各学部にタイムリーに必要な情報提供がどの教員もできる。（年度末アンケートで８５％以上が「できている」と回答）	○しんろだよりに返信欄を設けたり、個人面談・懇談で聞き取ったりして、児童生徒・保護者のニーズを把握する。また、個人懇談期間等に進路・支援センター室を開放し、自由に相談できる機会を設ける。 ○各学部の保護者向け進路懇談会の開催形態、内容等を工夫する。 ○各学部段階で必要な情報は何かを把握し、それに応じた職員研修を実施する。	○昨年度までは、保護者から進路担当への直接の相談は高等部の保護者から数件ある程度だったが、学期末懇談の開放期間中、各学部３～５名程度の保護者の来室があった。 ○中学部保護者対象に進路懇談会を、全学部保護者対象に卒業生出前講座の聴講案内を行った。 ○年度末の教職員アンケートでは、「児童生徒・保護者から進路についての質問をされた時に、適切に回答できるか」との問いに対して、「できる」「どちらかといえばできる」と答えた教職員の割合が６０％だった。	C	○どの教員も必要な情報提供ができるように、懇談前に担任への助言や情報提供を行ったり、職員研修の開催携帯、内容等を工夫したりする。
教育支援部	校内外の教育支援の充実	○校内資源を活用した校外支援の充実	○自立活動の指導についての研修を希望される支援学級の担任の先生が多い。 ○地域の園や学校から「落ち着きがない」「運動が苦手」等についての相談が毎年多い。 ○「感覚が未発達」であることが課題につながる相談が増えている。	○教育相談を受けられたり研修に参加されたりした園や支援学級の先生方の７割が幼児児童生徒の変容を実感している。	○地域の園・学校の職員を対象とした感覚の統合や発達に関する研修会を８月に実施する。 ○教育相談を通して、個の実態に応じた具体的な指導内容について一緒に考える。 ○研修に参加されたり、教育相談を受けられたりした園や学校に対し、継続的に連絡を取ったり年度末に聞き取りを実施したりする。	○研修に参加されたり教育相談を活用されたりした園・学校から、子どもの変容についての聞き取りを実施した。本校の研修内容や助言等を参考にし、指導支援の工夫・改善をされており、「落ち着いてきた」「姿勢が良くなった」「癇癪が減った」「目の使い方が上手になった」等、先生方の９割以上が子どもの変容を実感されていた。特に就学前の早期介入は子どもの変容がより大きかった。	A	○本校が主催する特別支援教育に関する研修会において園や学校の先生方の参加人数が増えるように、開催時期や研修内容、周知の仕方等を検討する。
		○活用しやすい校内支援体制づくり	○昨年度のアンケートで校内支援で実際に介入したことで効果があったと実感された先生は８割以上いた。しかし、校内支援での取り組みについての紹介は定期的にできなかった。 ○記録やストラテジーシートを活用して、問題行動の機能を分析したり、支援の仕方を共通理解したりすることができる先生が少しずつ増えてきている。	○校内情報サイトを通して、校内支援の取り組み事例や支援についての情報等を紹介、発信することで、教員の８割以上が参考になったと実感又は実践に取り入れている。	○定期的に校内情報サイトに校内支援の取り組み事例を載せる。 ○取り組みの事例について分かりやすく活用しやすい紹介の仕方を工夫する。 ○年度末に、校内支援に関するアンケートを実施する。	○定期的に校内情報サイトに校内支援の取り組み事例を載せた。掲載内容について年度末に行ったアンケートでは、「参考になった」と１０割の教員が回答。また「活かせた」と９割以上の教員が回答した。（回答者数９５人）		○教員のニーズに合った校内支援の取り組み事例を今後も継続的にサイトに載せていく。

様式３

	年度当初					評価結果（２）月		
	評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
体力づくり推進部	体力の向上	○児童生徒の体力（特に柔軟性と全身持久力）の向上	○日常生活において、経験不足等により滑らかな動作が難しく、ぎこちなさや不器用さのある児童生徒が多くみられる。 ○瞬発的な動きはできるが、一定時間運動をし続けることが苦手な様子も見られる。 ○体力の向上を目指して、各学部で実態に応じた取り組みを行っているが、育てたい体力のイメージが不明瞭なところがある。	○児童生徒の柔軟性や全身持久力に関する記録や各種テスト等の結果が前年度より上がっている。	○児童生徒が楽しみながら取り組めるような柔軟性や全身持久力の向上を意図した活動について、実践例を紹介する。 ○児童生徒の体力の変容について、運動能力テスト等の結果や記録をもとに検証する。 ○体力づくり推進計画における「育てたい体力」とそれに対応する活動例の整理を行う。	○児童生徒が進んで体を動かそうとする場面が増え、体力テストの結果において、柔軟性（長座体前屈）や全身持久力（20mシャトルラン）の向上が見られた。	A	○「育てたい体力」やその活動について、教職員の共通理解を深め、体力づくりや保健体育の学習の中だけにとどまらず、幅広く活動に取り組んでいく。
		○運動を楽しむ機会（体育的行事や生涯スポーツ活動等）の増加	○新しい体育的行事として、児童生徒が運動を楽しむことができるスポーツフェスティバルを計画している。児童生徒が実行委員として企画や運営に関わる場面を設定している。 ○障がい者スポーツ大会など、外部の大会に興味を持つ児童生徒・保護者が増えてきている。	○体育的行事や授業において、児童生徒が主体的に楽しみながら運動できるような活動を取り入れる。（年度末アンケート結果で７０％以上が「できた」と回答） ○外部大会やスポーツ教室等に新たに参加しようとする児童生徒が昨年より増えている。	○体育的行事等において、児童生徒が企画や運営に関わる場面を増やす。 ○遊びや授業の中で、楽しみながら運動に取り組める実践例を紹介する。 ○外部大会やスポーツ教室等への参加啓発を行う。	○体育的行事や授業において、児童生徒が主体となって取り組んだり楽しみながら運動したりする場面が増えた。（年度末アンケートで約９０％が「できた」「少しできた」と回答） ○スポーツフェスティバルでは児童生徒会が全校ダンスや学部種目等の企画を行ったほか、次年度に向けた改善策を考えたり、新たな選択種目のアイデアを出したりするなど、主体的な活動ができた。 ○障がい者スポーツ大会は昨年度の１競技１８名の参加から３競技２２名と増加し、好記録により全国大会へ出場・入賞することができた。また、どの学部でも外部講師を招いて、フライングディスクやカローリング、パラフットボール、ブレイクダンス等のスポーツに取り組むことができた。	A	○次年度のスポーツフェスティバルの開催に向けて、さらに児童生徒が関わる場面を増やす。 ○今後も継続して、障がい者スポーツ協会やＣＨＡＸ、パラフットボール協会などの外部組織との連携を深めていく。 様々なスポーツに取り組める機会を作り、将来に向けて余暇活動等に取り組めるような運動の幅を広げる。
表現活動推進部	表現力向上	○表現力向上の推進	○学校生活の様々な場面で児童生徒の表現力が向上するような学習活動を設定している。	○児童生徒の表現する意欲、表現する力が向上する場面を、教職員が意識して設定している。（年度末アンケート結果が70%以上）	○けんべい祭をはじめ、児童生徒が学習の成果を発表する場を設定するよう教職員へ周知する。	教職員は、さまざまな学習場面で児童生徒の表現する意欲や表現力が向上する活動を設定した。（年度末アンケートに回答した教職員の約96%の教職員が「できた」「まあできた」を選択）	B	けんべい祭以外にも日頃の学習を発表する機会を設けるなどして、児童生徒の表現力をさらに育てていく。
		○表現できる場としての「けんべい祭」	○昨年度のけんべい祭では、それぞれの学部、学習グループで工夫して、児童生徒が生き生きと発表することができた。	○けんべい祭で、児童生徒が学習の積み重ねの成果を生き生きと発表している。（事後アンケート結果が保護者、教職員の70%以上）	○けんべい祭のねらいや取り組みの視点を明確にする。 ○児童生徒の発表がよりよいものになるよう、リハーサル等を見合う会を設定する。	けんべい祭では、各学習グループで工夫し、児童生徒が生き生きと表現する姿を発表することができた。（事後アンケート回答者の95%以上が「できていた」を選択。アンケート回答率は保護者、教職員ともに約50%。）		来年度のけんべい祭も児童生徒が学習の成果を生き生きと発表できるよう、ねらいを明確にして祭に向けた学習に取り組む。

様式３

	年　　度　　当　　初					評　価　結　果　　（　２　）月		
	評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
事務部	安全で安心な学校づくり	○教育環境及び施設・設備の適切な管理	○施設・設備の老朽化による修繕の必要性または安心安全な教育環境の整備及び特色ある教育活動の支援のためにも中長期な計画策定が必要である。	○予算の効率化・重点化を推進し、健康や安全に配慮した教育環境の整備を図る。 ○児童生徒にとってよりよい環境づくり、児童生徒を中心にした教育環境の充実を図る。	○厳しい財政状況を踏まえ、徹底した経費節減に努め効率的な予算執行及び的確な予算要求によって中長期的に学校財務基盤を安定させる。 ○業務改善を図るとともに、職員組織への現状説明により計画的な予算執行に努める。 ○現状を把握・分析して、課題を整理し、優先順位をつけて業務に取り組む。 ○学校全体の動き（方向性）を見ながら業務に取り組む。	○運営費予算（執行）状況について教職員へ情報提供（4、10、1月）をした。 ○下水道接続工事、高等部作業棟冷暖房設備改修工事、管理教室棟屋上防水改修工事等が施工済み、校内駐車場整備業務を施工している。 ○急遽の施設修繕について、適宜臨時要望し、追加で予算配分等され施工済み。（教室エアコン修理、汚水中継ポンプ交換、旧中学部ランチルームステンレスシンク設置） ○理科教育設備整備費等補助金により天体投影機を購入した。 ○令和7年度予算で小学部棟トイレ改修工事、正面駐車場混雑解消工事を予算要求している。 ○教育委員会で策定された長寿命化計画により令和7年度予算で高等部棟屋上防水工事、大体育館・中体育館・プレハブ棟エアコン更新工事、非常用放送設備ほか更新工事、自動火災報知設備更新工事等を予算要求している。 ○教育実習設備整備費で真空式土練機整備（継続）を要求している。	B	○予算（執行）状況を確認し、決算見込みをたて、教職員へ情報提供していき、計画的な予算執行に努める。 ○予算執行については、必要性を精査し、早期に事業効果が発揮されるよう計画的な執行に努める。 ○施設修繕については、教育委員会で策定された長寿命化計画に併せて、学校内で課題を整理し、優先順位をつけて予算要求をしていく。